

【1】世界の王になる為だけなら（スコルピオス）

『オリオン!? 何故まだここにいる!』

『ダメじゃない殿下。あんたが最初に来ちゃ』

王の身体に向かつてまっすぐ放たれたオリオンの矢。確実に心臓を貫いたはずだ。彼の命が助かることはなく、玉座は私のものになる。

『傀儡と成り果て国に害なす前に』

そう自らの死を望んだ王の為に、王位を継ぐ私と暗殺者の共謀を疑われる可能性を生むことは許されない。王が暗殺され、暗殺者の姿を唯一目にしたのが日頃から王位を狙う妾腹の王子だけなど冗談にしても性質が悪い。それは私にもわかつている。

だが、本来であれば既に城を離れているはずのオリオンがまだこの場所に残っていることに、私は自分の行動が正しかったと確信する。

『万が一を考えた結果だ。グズグズするな、早く行け』

『ダメ。もう遅いよ』

『オリオン!』

バタバタと騒がしく近づいてくる複数の足音に思わず舌打ちが

漏れる。苦笑いするオリオンを見て更に苛立ちが募った。

まだ遅くなどない。再度脱出を命じるために口を開くと、遮るようにオリオンが首を振った。

『オレがなぜ裏切ったか? さて、その心は女神のみぞ知るってね』

『オリオン!!』

わざと張り上げられた声は、当然兵士たちの耳にも届いただろう。なぜ私の命令に従わない!

抑えきれない焦りにオリオンは一瞬意外そうな表情を浮かべると、すぐにそれを消す。代わり造られるのは微笑みの形。愛を囁くような甘い声で告げるのはこの上なく残酷な内容。

『殿下、どうせ死ぬならアンタの手で。ね? お願いだよ』

『この愚か者が!』

部屋の前で足音が止まる。時間切れた。自分以外の手にかけてくるくらいなら——まんまと奴の思惑に乗せられたことを忌々しく思いながらも、懐から短剣を取り出し、オリオンの胸に突き立てた。そして——

『』

* * *

ふわりと意識が浮上する。

またあの夢か。

男が最後に口にした言葉を聞き届けることはできなかつた。

臉を上げて強張つた体を解すように息を吐く。訓練のための遠征とはいへ、城のものと比べて硬い寝台は好んで横になつていたいものではない。自然と眠りも浅くなるのが、警戒という意味では効果的なかもしれないと益体の無いことを考える。

外に出て空を見上げると、地平線のあたりにはまだ少し星が残つていた。陽が昇り切る前の冷えた空気が火照つた身体に心地よい。いつの頃からか不思議な夢をみるようになった。今まで歩んできた人生をなぞるような夢。最初はただ単に昔の出来事を夢として見ているだけと思つていたが、どうにも細かな部分が自分の記憶と異なる。

そしてその違いは、夢の中で一人の男を拾つてから、決定的に広がつていった。

例えば、私が部下にしたアナトリアの武術大会の優勝者は金髪ではない。例えば、私には仕事中に息抜きを勧めにくるような腑抜けた部下はいない。例えば、アルカディア王を弑したのは弓の使い手

ではない。例えば、いざれ捨て駒にされると理解してなお、私の使ひ捨ての道具になることを望むような馬鹿な部下はいない。例えば、私には死の直前まで私の望みが叶うように付き従つてくれるような部下はいない。

いや、所詮夢は夢だ。それ以上の価値もそれ以下の価値もない。軽く頭を振つて意識を切り替える。いつまでも気にしていても仕方がない。朝の食事をとつたらすぐに移動を再開しなければならぬ。途方もなく先の長い私の望みを叶えるためには、一瞬たりとも無駄にできる時間は無いのだ。

* * *

スコルピオス、と目の前の男が呪うように私の名前を呼ぶ。行軍中の私の部隊に単身乗り込み、私との一騎討ちを望んできた男。

「——！」

太陽の光を溶かし込んだような輝く金の髪、笑えば多くの人を惹きつけて止まないであろう整つた顔立ち。告げられた名乗りは夢の中で知つた名前と同じもので、星女神の神器を授かり、難無く使ひ